

# 「郷土佐伯の碑文」の出版について

日輪 当午塔と 豎田 合戦

弥生町 古藤田 太

會員益田学先生（医師）が長年に亘って、佐伯地方の碑文について研究解読を続けられ、十年程前に我が『佐伯史談』を通じて発表されたが、内容のある研究だけに刊行を促す声が次第に高まり、今回「弥生町歴史と文化を語る会」が、この碑文集を刊行する運びとなった。

碑文の解読研究と云うことは、佐伯はおろか県下にも其の例を見ないことであらうかと思う。

碑石の大半は風化が甚だしく、解読を急がねばと云う気持が先生の胸中に多分にあつたと思はれ、苦労を重ねられて、一つ一つ丁寧に拓本を採られ、正確を期して解読を続けられたものである。

碑の幾つかは現在辺鄙になつていて、しかも草木に深く覆はれている。又碑の多くは苔生し、拓本を採るまでの事前作業に多くの時間を費やしたものと思はれる。

碑文集の刊行に当って、改めて各碑をたづねてみるとこれこそ大事な「歴史の証人」だと通感するものが多い。

この碑文集は、郷土が産んだ偉人の事蹟を語り、郷土の歴史を物語り惻々として胸に通るものも多い。

今夏、岩田善市氏と岸河内の奥にある耳塚と、日輪当午塔をたづねた。私も幾度かここを訪ねたことがあるが今回は久しぶりであった。草を払いながら道なき道を辿って行くと、大越川の川縁の松の木の下に、あまり苔もつげずにポツンと日輪当午塔（千人塚）は建っていた。

南面に「日輪当午塔」、東面には、佐藤掬水の真に流麗な国文体の碑文が、美しく彫られているのが目にしみる程印象的である。西面には、

宝塔創立す名谷の陽、昔、戦争の日幾兵将を屠る。幽

魂未だ散せず殺氣霜の如し。茲に蘆荊氏且悲み且傷み其の祭無きを憐み為に経王を埋む。妙典の功德は豈思量す可けん。願はくは諸含靈存する無く、亡ぶるなく此の善の利に乗じて疾に覺場に登らんことを(以下略)……とある。

佐伯軍(城主佐伯惟定)と島津軍との大合戦がこの辺りで行はれたのは天正十四年(一五八六)十一月のことであるから、この塔が建てられたのは随分後年のことである。

当時の波乱に満ちた戦国の様相を、しばらく『上井寛兼日記』や、『大友史料』でたづねることにしよう。



日輪当午塔

島津義久は天正十四年正月、鹿児島島の談議所で、豊後討伐を決定。肥後口、日向口の両面から進寇すべきか、又日向口の一方から侵入すべきか、大乘院盛久に籤を取らした結果、肥後日向の両面からの豊後征討が決められ、肥後方面軍は義弘をあて、日向方面軍は義久が当ることも決定された。豊後の大友義統は既に輩下諸將の統制を失っていて、志賀道益(諱は親孝、親教)、入田義実が三田井氏と共に島津氏に通謀しており、地図を持ちこみ豊後軍の配置情勢を説明する有様であった。出陣の時期は七月まで延ばしてはならないとされていたが、六月下旬急に豊後侵寇を中止した。

これはかねてより伊集院忠棟が豊後討伐の場合の措置として、肥筑の諸氏から質人をとることを交渉していた。秋月種実ならびに龍造寺政家は応諾したが、筑紫広門だけはこれを拒み、大友義統に味方すると明言した為に、島津としては豊後討伐を中止して、筑紫広門退治を行うこととなったためである。

九月四日の『寛兼日記』は、折角捕えた筑紫広門が逃走し、太守島津義久が、「これ軍令の馳緩に因由する」と、ひそかに落涙し、「豊後討伐にかかる失態を重ねな

ば弓箭の恥辱」と老臣等に紀綱の振肅を厳命したとある。

九月二十七日には秀吉の命令によって仙石秀久、ついで長曾我部信親が豊後救援に到着したが、兵力は極めて少なく各二百と報じている。島津家久は春頃瘡を病み佐土原で休養していたが、十月頃は治癒したものであろうか、十月十四日、家久が進発し、日向諸將に出陣を触れる。十月十八・九日、「軍勢は縣（延岡市）に集結すべし」と発令された。この頃には豊後軍にも、黒田孝高、毛利輝元と相次いで到着してきたが、大友義統と共に宇佐時枝に出動する為豊前に発進して行った。この豊後軍主力が留守の間に宇目口を撃破して進攻するようにと頻りに入田義実が情報を島津側におくっている有様が『寛兼日記』に述べられている。

島津の先発隊が、早や梓山を越えて大野郡に入って来た。柴田紹安父子が島津側につき、朝日嶽城が土持親信の守るところとなる。家久は更に兵を進めて三重の松尾山に陣した。

十月二十三日家久は海部郡に入り、使僧玄西堂を遣はして佐伯惟定に和睦をすすむ。佐伯惟定は玄西堂の附兵十九名を番匠川原にみな殺しにしたことは有名な話であ

る。

十一月三日になると家久は、土持親信、新名次郎左衛門尉等に二千余兵を附して、惟定を柵牟礼城に攻めんとして、大越を経て岸河内に放火し、堅田方面に進んで来た。

『大友文書録』によると佐伯軍は佐伯大膳亮惟末、高畑伊豫守が一隊をつくり、佐伯久右衛門惟澄、高畑新右衛門尉が第二隊を、佐伯進士統幸（惟定の弟）、長田天楽が第三隊をつくった。これに佐伯軍の知名の人が続いているが、特筆すべきは、堅田三十六地士と云うのが挙げられている。これらの人達が遊軍を編成して活躍していることである。諸隊併而一千八百余兵とあるから、佐伯軍としては極限の徵募兵力と考えられる。戦闘は汐月、江頭、長池、西野、普坂（府坂）、岸河内、鬼原、長瀬原で展開されたが、敵は多くの屍体を残して敗走した。佐伯軍の名ある戦死者も数多く列記されている。佐伯軍にとってはおかたない激戦であったものではあるまいか。多くの敵の首級は集められて普坂峠に埋められた。ここに建てられた塚が「普坂三塚と号す」とある。（一説に現在竹角に移されているものがこれなりと。）

余りに多くの敵の戦死者の為に首級の代りに、耳を削ぎ  
惟定の実見に供した。この耳を埋めた所が、耳塚であ  
るとされているが、立派な碑が「さこそ」と思はれる辺  
りに建てられている。

岸河内の奥は堅田合戦の最後の決戦場となった処と伝  
えられる。その後この辺には亡霊による異変が絶えず起  
った。日輪当午塔の佐藤掬水の碑文に、

そこばくの将卒此原の露と消ぬるを静ならぬ世のさま  
にて屍おさむ人もあらざれば貴となく賤となく同枯骨  
とはなりにけらし夫より星移りものかはりぬれど其遺  
恨いまにさりかたきや空曇り雨くらき夜は靈火処々に  
もへ怪しうことなる声ほの聞へて更におちこち人の魂  
を寒からしむ。

島津軍將兵の屍体は山々谷々に放置され、長い歲月の  
間に白骨化した。貴となく賤となき有様で、誰からも供  
養されることもなかった。「静ならぬ世の様に」とあ  
る通り、戦国の世から引続いて庶民の生活は石をもて追  
はるるようで、敵兵の供養など思いもよらぬことであ  
った。

シヨウキョウ  
貞享五年（一六八八）になって、時の大庄屋蘆荻清兵  
衛がこの亡魂供養を大々的に執行し、耳塚の建立をした  
が、兩軍死闘の地、長瀬原に日輪当午塔が建立されたの  
は更に後年のことである。「幽魂未だ散せず殺気霜の如  
し」とあるから亡魂騒ぎはずっと続いていたことであ  
らう。

文政五年（一八二二）になって矢張り時の大庄屋小庄  
屋は亡魂の供養を行ってこの「日輪当午塔」が建てられ  
たものである。島津軍と呼ばれるが、日向兵が大半であ  
ったと私は思う。

私達はうっかり見落してしもう路傍の碑の物語を、心  
静かに聞こうではないか。碑が語りかける物語りこそ、  
真実の歴史であり、我々の祖先の生活の実体を教えてく  
れるように思う。私達はこれから居ながらにして「郷土  
佐伯の碑文」をとおして、各碑の物語を聞くことができ  
るわけである。

・注「郷土佐伯の碑文」の刊行は十一月下旬の予定。